

町の学芸員

その生活と意見

浜口哲一

博物館とは何かと問われて、「博物館でもっとも大事なのは物Ⅱ資料である」と答える人もいる。「博物館の命は展示」という人も多い。私なら何と答えるか。平塚市博物館建設準備室に職を得て一四年、館がオープンしてから一年、「町の学芸員」として仕事を続けて来て、博物館を生かすのも殺すのも「人」であるというのが率直なところでの感想である。それは単に学芸員だけのことではなく、博物館を場として活躍する多くの市民の力なくしては博物館活動は語れないと思う。

ところで博物館と一口で言っても、いろいろな条件のいろいろな性格の施設があることは論を待たない。平塚市博物館は開館準備の過程か

ら、「地域博物館」こそ我々の目指す姿と考えて活動を行ってきた。ここでいう地域博物館とは地域に密接したテーマを中心に展示や活動を行い、その地域に住む市民が主に利用するような博物館のことである。その点で地域をテーマにするが利用者は遠方から集まることの多い「観光地型」、広域的なテーマを扱い来館者も全国から集まる「中央型」と対比されるような性格の館である。

こうした地域博物館を実際に支えている学芸員の日常を紹介しながら、その生活と意見を記してみたと思う。なお私が担当している生物の話題が、ほとんどになる点はお許し頂きたい。

- 火曜日―小学校の職員研修に
- 水曜日―山の調査に
- 木曜日―植物の調査に
- 金曜日―資料の整理
- 土曜日―視察と観察会
- 日曜日―カエルを調べよう
- 終わりに

●火曜日―小学校の職員研修に

午後、平塚市に隣接するI市のT小学校から依頼されていた職員研修の仕事で出かける。研修のテーマは「身近な野外観察」で、学校の周りに設けられたコースに沿って動植物の観察法を教えてほしいというものであった。この学校の先生の中に二人ほど博物館の主催する観察会の熱心な参加者があり、そんな縁で時々招かれる機会があるのである。

二〇人ほどの先生方と校庭を出て歩き始めると、すぐに竹藪があった。さっそく第一の観察を始める。竹藪を作っているモウソウチクと他の竹との見分け方、筍の伸び方、竹の皮とは何

か、新しい竹の肌触りなど一カ所に立ち止まっ
ていろいろな話題を取り上げる。「今伸びてい
る竹の寿命はどのくらいでしょう」と聞いてみ
ると、竹は長生きだと言う常識が邪魔して多く
の先生は「五〇年かな六〇年かな」と答える。

実は何一〇年というのは地下茎で繋がった竹藪
全体の寿命のことで、一本一本の竹は三々四年
しか生きないのである。その証拠に竹藪の中
には枯れた竹が何本も倒れている。その枯れ竹を
一本引き出して割って見せる。こうした枯れ竹
はいろいろな小動物の住み家になっていて、観
察のよい材料になるのである。この時もアリの
家族とゾウムシの一種が出て来て皆を驚かせ
た。

次の観察ポイントはサクラの木である。サク
ラの木の葉について二種類のこぶを探してもら
う。一つは葉柄の付け根にある冬芽である。三
年生の理科で、木の枝の一年間の変化を観察す
る教材があるが、それを扱う時に、春に葉が伸
びると同時に、次の冬を越す冬芽が準備され
ていることに目を向けてみようと言をする。も
う一つのこぶは葉身の付け根にある蜜腺であ
る。アリが実際にその腺を訪れているのを見
てもらい、こんなところにも植物と昆虫の密接な
つながりがあることを知ってもらおう。サクラに
は大きなガの幼虫も見られた。その毛虫を注意

深く枝から引き離して手に乗せる。若い女性の
先生からはキャツと悲鳴も上がるが、手に持っ
て感触を知ること自然観察の大切な体験であ
ること、ただし毒を持った毛虫には十分気をつ
けねばならないことを分かってもらおう。

田畑の間をぬる観察コースではほかにたく
さんの動植物に出会うことができた。ヒメジヨ
オンとハルジオオンの違い、アリの運ぶクサノ
オウの種子、キシヨウブの花の構造、水田から
聞こえるカエルの声等々質問に答えたり、解説
をする内、あつと言う間に予定の時間は終わっ
てしまった。

学校へ戻る道すがら、ふと耳にした感想の言
葉は、「生徒を連れて来てもらうこぶでしよ
ね」だった。観察路は決められていても実際に
それを授業に生かしている先生は必ずしも多く
はないらしい。その大きな理由は、何も知らな
いから生徒を連れて出て説明ができないと
か、質問に答えられないといった理由らしい。
この研修がそうした事態を少しでも改善するの
に役立てば、目的を達したと言えるだろう。私
が最後のまとめで強調したのは、おっくうがら
ずに野外に出ること、生徒一人一人の発見を大
事にし教師も共に感動し調べる、そんな雰囲気
で指導してほしいということであった。

こうした小学校での研修の例で分かる通り、

学芸員には浅くても広い知識が要求される。特
に生物の分野では野外を歩けば無限にいろいろ
な物に出会うチャンスがあり、子どもも大人も
いろいろなものに興味をひく。その時に専門でな
いから分からないと言うのではなく、一緒に調
べたり、できる範囲で情報を提供することは非
常に重要なことである。そうすることで、小さ
な疑問が大きく育っていく可能性も生まれてく
る。

そうした点で学芸員の立場というのは、町の
診療所の医師に近いのではないかという気がす
る。医療の分野ではプライマリーケアという言葉
葉があるそうである。初期治療とでもいうのだ
ろうか。頭痛を訴えてきた患者にはいろいろな
原因の可能性がある。風邪の症状かも、精神的
なものかも、最悪の場合は悪性の脳腫瘍かもし
れない。そこで診察に当たる医師にまず要求さ
れるのは、広い知識を持ち、多くの可能性の中
から最善の処置を判断できることである。脳手
術が必要であれば専門病院に送り込めばよい。
自分自身が脳外科の専門家であっても、頭痛の
原因が精神的なものである場合を見抜けないで
は、町の診療所では役に立たないのである。

博物館全体としても、地域の館は市民の幅広
い要求に答えるために、いろいろな分野を包含
した総合性を持つていることが望ましい。その

総合性は、多数の専門スタッフを抱えた総合病院のそれではなく、小人数だが目配りの効く学芸員による市民生活に密着した「等身大の総合性」であろうか。

●水曜日―山の調査に

この日は早起きをして五時に家を出、始発電車に乗って西丹沢に調査にでかける。山中湖畔の平野から山伏峠に登り、高指山、鉄砲木の頭、三国峠と続く山梨県との県境の尾根を歩く予定である。一番大きな目的はこの付近に分布するタンポポの種類を調べることである。

タンポポ類はここ一〇年間私が入れて取り組んできた植物の一つである。そのきっかけは、在来種のカントウタンポポと帰化種のセイヨウタンポポ・アカミタンポポの分布状況を調べる、いわゆるタンポポ調査に参加したことにある。東京都を中心に広域的にタンポポ調査を実施している友人に協力を求められ、それを博物館の行事として参加者を募集して行うことを思いついた。それが平塚市博物館の特徴的な事の一つである公開調査「みんなで調べよう」のスタートであった。

平塚のタンポポ調査は昭和五十三・五十四年度の二カ年にわたってのべ六八人の市民の参加

によって行われ、アカミタンポポが市街地に広範に広がっていることを全国で初めて分布図で示すなど大きな成果を上げることができた。

その調査で各地のタンポポを見て歩くうちに気にかかっていたのは、在来種のタンポポの種類のな問題である。二年間のタンポポ調査の結果をまとめた報告を読まれた専門家の方から、平塚にはカントウタンポポだけでなくトウカイ

タンポポも分布しているのではないかという指摘も受けた。タンポポ類の分類はなかなかやっかいな問題を含んでいるのだが、幸い新潟大学の森田竜義氏によって全国のタンポポの頭花を計測して統計的に比較する仕事が始められており、その結論はカントウタンポポもトウカイタンポポも同一種の中の変異と見るべきで、地域によって頭花の性質が連続的に移り変わっているというものであった。私もこの結論に賛成なのだが神奈川県内での細かい変異の様相を知るには、やはり自分でサンプルを集めて計測してみなければならぬ。これが五年間ほど春になると少しずつ進めている研究テーマである。

ところがこの仕事のためにタンポポを訪ねて歩いていたところ、丹沢山地の千メートルを越える尾根筋には違った種類のタンポポが分布していることに気づいた。これはエゾタンポポと呼ばれる種類で、カントウタンポポが二倍体で

あるのに対し、倍数体であるという特徴を持つ。外見的にも花茎や葉の中脈が赤みを帯びるなど一目でそれと分かる特徴を持っている。エゾタンポポの分布に注意して調べて見ると、丹沢山地には点々と分布するのに、箱根山地には分布しないことが分かった。エゾタンポポは東北地方では平地に分布するが、関東以西では山地のみに分布する。ということは氷河期に分布を南下させた種類が山地に遺存的に残ったとも解釈できる訳で、そのことから丹沢と箱根の地史と植物相の関係を探る糸口が得られるかもしれない。どんな見取り図になるのかはまだ白紙の状態だが、今現在私がつとも関心を寄せているテーマである。

この日の西丹沢行きも、未調査のこの地域でのエゾタンポポ探しが大きな目標だった訳である。山伏峠のトンネルから大棚の頭に登るとそこはもうブナ林の一面である。コルリやヒガラ、さらにはジュウイチ、マミジロなどのさえざりが間近に聞こえる。森林帯はタンポポの生えている可能性はないので、植物の写真を撮ったり、昆虫を見たりして歩いていく。木々の新葉が展開した時期で、葉を食べるハムシやゾウムシの仲間をよく見かける。ミズナラの葉を巻いてゆりかごを作っているゴマダラオトシブミ、イタドリ枝先をおれさせているドロハ

マキチヨツキリなどオトシブミの仲間も五種類ほど観察することができた。仕事柄、資料を収集する必要があるので、適宜採集も行っていく。

一時間ほど歩くと林が切れ、山中湖を見下ろすカヤトのピークに登りついた。鳥もがらっと変わってコヨシキリのさえずりが流れてくる。ここからしばらく続く明るい尾根筋が私がタンポポがあるに違いないと狙ってきた所である。自然に視線は下を向き、路傍の草むらに黄色い花を探していく。ピークから下り始めてすぐ、あった！ 紛れもないエゾタンポポが私を迎えてくれた。しかし、時期が少し遅かったのか、綿毛が飛ぶ寸前になった株ばかりである。これでは花粉を調べられないので、倍数体のエゾタンポポである証拠がつかめない。一つでいいから花か蕾がないか、祈るような気持ちで草を分けていくと、横に倒れて地をほうような姿勢になった一本の花。目的を達した嬉しさに、写真を撮るのも忘れて、しばし花にみとれてしまう。

その後、鉄砲木の頭など数カ所でエゾタンポポのサンプルを得ることができた。ところが新しい問題が生まれたのは、二カ所で明らかにカントウタンポポのタイプの株が見つかったことである。この尾根は湖畔の農耕地との距離が近

いので、カントウタンポポが入り込んでいると見ることが可能だが、そうなると山中湖周辺にどんなタンポポがあるかも調べてみたくなる。問題は次から次へと広がっていくのである。

動植物を調べる者にとってフィールドに出ることは何よりも楽しいことである。特定のテーマを持って歩く時は知的なスリルにも満ちた体験をすることができ、オリジナリティな情報を自分で手に入れる喜び、それは大袈裟に言えば学問の喜びであり、学芸活動の原動力はそこにあると思うのである。

先に学芸員は広く浅くと述べたが、それは本や他人から得た知識を受け売りすればよいという意味ではない。広い関心を持つ一方で、特に興味を引かれたり、チャンスに恵まれたテーマについては自分の力とことん追求しなければならない。

学芸員の大先輩で先年惜しくも亡くなられた日浦勇氏はよく自前の精神ということを言われていた。「博物館で行われる教育は、学芸員が自ら取り組んで調べたことを、自分の言葉で伝えるという、自前の精神が基本になければならない」というのである。現代は分業の時代であり、専門化することによって仕事の能率を高めるといふ発想が一般的である。学校の先生でも教える専門家の立場に安住してしまっ、自分

写真一 紙しばいを使った野外解説



のテーマを持ってオリジナリティな研究に取り組んでいる人は非常に少ない現状がある。しかしそれでは、試験の点数を上げる為の技術は教えられても、勉強の面白さは結局伝えられないのではないだろうか。

またこうした調査に取り組む時に、問題になるのは博物館活動のフィールドということである。地域博物館は、その立地する地域を活動の本拠とすべきことは言うまでもない。しかし、それを例えば市町村の行政区画内だけに限定し

てしまうと大きなマイナスになる恐れがある。〇〇市の植物相を記録するといった仕事を機械的に進めるのであれば、それでも構わないのだが、例えば先程から述べているタンポポの地理的変異を明らかにするといったテーマに取り組むと、その市のタンポポを理解するために、周辺地域、県内さらには隣県までも探索の手を伸ばさなければならぬことがよく出てくる。広域的な視野に立たないと地域のことも理解できないのである。

平塚市博物館は、条例に館のテーマが「相模川流域の自然と文化」であることをうたっている。それは、地域にフィールドを求めるところを宣言するとともに、市内だけに限定するのではなく、広域的に活動していくことをも主張しているのである。

●木曜日―植物の調査に

昨日に続いてフィールドワークに出掛ける。今日は神奈川県植物誌調査会の三人の主婦の人たちと同道する。

この人たちと一緒に大きなプロジェクトと取り組むようになって既に八年間が経過した。県立博物館と、横浜植物会という市民団体が中核になって「神奈川県植物誌調査会」が結成さ

れ、全県的なフローラ調査を行うことになったのが昭和四十九年のことであった。この話を聞いて、平塚でも是非参加したいと考え、県立博物館の担当学芸員の方のところに電話したのが昨日のことのように思い出される。最終的にはこのプロジェクトは県立博物館・平塚市博物館・横須賀市博物館という博物館のネットワークが中心となり、そこを活動場所に多くの市民が調査に参加するという全国の自然史調査でも非常にユニークな体制で進められてきた。そして昭和六十三年に予定されている「神奈川県植物誌」の発刊に向けて最後の作業が行われているところである。

平塚市博物館はこの調査で藤沢・伊勢原・平塚・秦野等の湘南地域の調査を担当し、館の協議会委員でもある守矢淳一先生をリーダーに、主婦を中心とした一〇人ほどのメンバーで調査に当たってきた。実際の調査は地を這うような地味なもので、各自担当した地域を季節季節にくまなく歩き回り、記録できた植物を一種類について必ず一点の標本を作るというものである。担当する人のいない調査区は時々有志で合同調査を行い、この日歩いた中井町もそうして調べてきた地域の一つである。

二宮駅からバスで中井に入り、御所の宮から歩き始める。昨年度までの調査で中井町では七

七五種類の植物が記録されているが、近隣の地域と比較してみるとまだ二〇三〇種類の追加が可能であろうということで今日の調査行が計画された。

何回も何回も足を運んだ地域から新しい種類を見付けるのは容易なことではない。神社の境内では何も新しい収穫は見出すことができなかった。ところが裏の墓地を回って見るとスズメノチャヒキが群生していた。当然分布しているはずなのに、記録もれになっていた種類の一つ

写真一 2 みんなで植物を調べる



である。数年前に記録された時の標本が別の種類だったため分布図から削除されていたミドリハコベも見付かる。今回の調査は証拠となる標本があるものだけで分布図を作っていこうという方針なのである。

台地から降りて水田に出ると、一面にミズタカモジが生えた休耕田があった。これも中井町初記録である。この植物はカモジグサの水田に適応した生態型とも言われるもので、今回の調査が始まるまでは県内からは正式に報告されたことがなかった。調査開始直後、その成果としてミズタカモジの新発見が新聞記事になったほどである。ところが調査に進むにつれて、この種類はどこの水田地帯にもごく普通に分布することが分かってきたのである。

Mさんがイヌムギを採集してきた。イヌムギは南米原産の帰化植物で、いたる所に群生する代表的な雑草だが、今回の調査で、大変よく似た別の種類が帰化していて、いつのまにかかなり広がっていることが分かってきたのである。仮にイヌムギモドキと呼ばれるその種類はイヌムギより雄しべの葯が五〜六倍長いことで区別できる。その区別点でチェックしてみたところ、平塚市博物館にイヌムギとして収蔵されていた標本にも多くのイヌムギモドキが混ざっていることが分かった。標本が残されているこ

とはそうした再チェックに大きな威力を発揮する。中井町のも以前に採集されたのはイヌムギモドキで、真正正銘のイヌムギを探すことが今日の宿題の一つになっていたのである。

神奈川県のように多くの研究者が調べた県では、植物の分布について今さら新しい知見など生まれそうにないように思える。ところが実際には、上記の例にあるような意外な事実が次々に明らかになってきた。

つまり県内の自然史的情報は未だ全く不完全なのであり、その不完全な情報に基づいて、例えば環境アセスメント等が行われている現状は非常に問題が多いのである。一日も早く、県土の自然史を網羅的にまとめ、それに基づいて自然環境の保全を確立しなければならぬ。そうした意味でも博物館の果たすべき役割は大きいはずである。

川岸の土手に腰を下ろして昼食にした頃から小雨になってきた。やがて雷鳴がとどろいて本格的な雨になる。一番近いバス停から引き揚げましようかと相談するが、みんな予定のコースを歩こうと言う。秦野市南部のメッシュまで足を伸ばして補充調査をしようというのである。ここ何年間か、こうした人達の熱心さに引きずられて私も植物の仕事に取り組んできたと思う。

調査会の方たちには野外調査だけではなく、月に二〜三回博物館での資料整理もお願いしている。分布の証拠として採集した標本にラベルを入れる、標本を分類順に配架する、ラベルのコピーをカードとして整理する。言葉で書くとなんでもないが実際には膨大な時間を要する作業を気持ちよく進めて下さった主婦パワーがあれば、植物誌の仕事は到底進まなかっただろうと思う。

私は私で頑張って、全標本にナンバリングをし、そのデータをマイコンに入力して、「湘南植物誌一〜三集」を編集した。合計約一万七千点の標本をリストアップした植物誌は貴重な地域資料であると自負しているが、これも調査会の方たちと博物館の協同作業の成果なのである。

公民館など社会教育施設の充実に伴って市民が学習する機会や場は飛躍的に増えている。しかしそこでの活動は、個人的なレベルに留まることが多く(そのこと自体は重要なことであるが)、その成果が社会的に還元されることは少ない。しかし博物館を舞台に展開される活動は得られた資料や情報が、出版物や展示などを通して市民の共有財産になっていく。そこにこそ博物館活動特有の機能があるのだと思う。

●金曜日—資料の整理

フィールドワークが続いたので久し振りに館内でじっくり資料整理をする。まず二日間の調査で収集してきた資料の標本製作である。

植物は新聞紙の間にはさみ、吸取紙を使って押し葉標本にする。次の日に吸取紙を替える時がポイントで、折れ曲がった葉を直したり、花の観察がしやすいように整えたりする。純粹に研究用であればそれほど神経質にならなくてもよいのだが、博物館の資料は展示に使うことを常に考えておかねばならない。くしゃくしゃの押し葉標本はいかに学術的に貴重であっても、展示には向かないのである。

植物の標本製作が一段落したので、今度は昆虫の処理にかかる。甲虫やカメムシは以前は四角紙包みにしたまま保存し、シーズンオフに標本にするというやり方をしてきたが、最近ではできるだけ足や触角をそろえて乾燥するように心掛けていた。これも植物の場合と同じく展示を意識してのことである。発泡スチロール板の上に虫を並べ、細いピンセットと待ち針を使って姿勢を整える。小さな虫も多いので、なかなか神経を使う仕事である。後できちんとしたラベルを付けられるように綿密なメモを付けておくのはいうまでもない。

私が博物館の準備室に勤めた一四年前は、生物関係の資料といえば、ヘビの抜け殻が一つとスズメバチの巣が一個の僅かに二点だけであった。それを思うと植物、魚類、クモ類、昆虫の一部の資料目録を発行できた現在は隔世の感がある。そしてその資料整理にも多くのボランティアの人たちの協力が不可欠であった。

ちょうどこの日、私が標本を作っているのと別の部屋では、湘南昆虫研究会の会員二人が報告書の製本を行っていた。平塚市役所では文書課にオフセットの印刷室があり、比較的気楽にいろいろな印刷を依頼することができる。空いている時であれば百ページ位の本は印刷してもらうことができる。ただし製本は自分たちでやらなければならないので、ボランティアの協力を求めて、ページ揃え、ホッチキス止め、見返し付け、表紙付け、裁断という手順を踏んで、一応格好のついた報告書を作る技術を学芸員は皆身につけている。

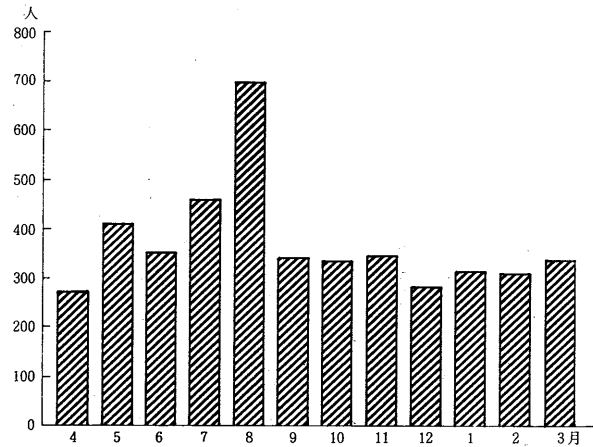
昆虫の報告は「湘南地方昆虫調査報告書」と題したもので毎年一冊ずつ、今年で三冊目である。高校の生物部等の会員が原稿を書き、リーダーのE君が自らワープロで清書した力作である。私も直翅類の目録を担当したが、ついで他の仕事の後回しになって遅れる作業をE君等にせつかれせつかれしながら、ようやく脱稿にこぎ

つけた。まとめていくと神奈川県で初めて報告される種も二、三取り上げることができ、やっとだけの甲斐は大いにあったのだが、一人でやっていたら当分完成はしていなかっただろうと思う。実際の所、学芸員は市民にお尻を叩かれてこそ仕事が進むものなのである。

平塚市博物館には昆虫、植物の他、クモの会、ねぐら研究会の合計四つの自然史系の調査サークルがある。こうしたサークルとつきあう上で私が原則としていることは二つある。一つは Give & Take ということ、博物館は活動場所の提供、資料の閲覧の便宜などを図る一方、特に資料や情報の収集では大いに館に協力してもらおう。もう一つは活動の成果が発表にたれるレベルに達した時は、研究報告への投稿、手作りの報告書の発行のような形で世に出す力添えをするということである。また当然のことではあるが成果の発表にあたっては、発行者として館の名前が出ることはあっても、学芸員個人の手柄には決してしないということである。

資料整理は博物館活動の基盤を作る仕事である。オリジナルな情報を見つけた時も学芸員は論文の形で言葉で表現するだけでなく、資料を直接使った展示の形で紹介を試みたり、その裏付け資料を目録の形で公表する。そうした表現方法は博物館独自のものであり、常に頭に置

図一 1 月別一日平均入館者



「平塚市博物館年報10号」による

いておかねばならない。また資料収集も市民が館活動に参画できる場面なのである。

●土曜日—視察と観察会

学芸員の仕事で案外大きな時間をとるのは来客への対応である。この日は埼玉県のI市から来館された社会教育課の職員と市民の計七人の視察の案内をすることになった。

約一時間の予定とのことで、まず三階の学芸活動の部屋から案内する。開館して一〇年もたつと建設の経過なども記憶があいまいになり、設計上どんな点に工夫したのかなども忘れてしまっていることが多くなる。視察の案内は、そうしたことの復習としてはなかなか役に立つのである。

各収蔵室の空調条件の違い、工作室や写真室の機能、プラネタリウムの設備等を紹介していく。生物資料の入っている第二収蔵室ではホルマリンが目には染みると言う声が大きかった。慣れっこになって全然気づかずになっていたが、液漏れをしている標本瓶がないかチェックする必要がある。出てきた。

展示室は展示手法や技術など裏方の視点での解説を主に行う。最後に科学教室で質疑の時間を取るが、職員からは予算規模や事業回数などの質問が多い。市民からは移動博物館の実態などが質問され、市民の中で博物館施設への期待が高まっているのが感じられた。今回の視察もむしろ市民サイドからの呼び掛けで実現したのもやしかなかった。平塚の場合は行政主導でできた館だが、近年各地で市民の中から博物館建設の運動が起こっているのは心強いことである。そして我々の館の視察が良きにつけ悪きにつけ刺激になるとすればこんな嬉しいことはない。

午後は隔週に開催している土曜観察会の日である。この日は平塚海岸で打ち上げをテーマに行った。集合場所の駅に行くとき、常連の家族づれの顔が並んでいる。初めての参加者も含めて総勢三五人で出発する。三〇分ほど歩いて海岸に着くと、早速自由に分かれて各自波打ち際に打ち上げられた動植物の死体などを探し、持ち寄ることにする。

分かれる前に、このところまとまって打ち上げられているカツオノエボシいわゆる電気クラゲについて注意する。からからに乾いているものは心配ないが、打ち上げられて間もない濡れたものは触手が体につくと刺される恐れがあるのである。

子どもたちの動きは早い。こんな物があつた、これなあにと矢継ぎ早にいろいろな物が運ばれてくる。ボラやヒイラギの死体、キンセンガニ、エボシガイのついた木片、貝ではダンベイキサゴ、バカガイ、サルボウ、海藻ではホンダワラの仲間など。平塚海岸は種類、量とも打ち上げの少ない海岸だが、大勢で探すといろいろな物にお目にかかることができる。見つかったもの一つ一つについて簡単な解説を加える。持って来たバケツに水を満たし、カツオノエボシを入れて触手を伸ばし、それが二メートルにも達するのを見てもらう。

次は各自がスケッチをして細かく観察する時間である。土曜観察会は「自然の新聞作り」をテーマにしているので、その記事の材料にするため取材カードというB6判の用紙にスケッチと気づいたことのメモをとるのである。これは室内での会の時に持ち寄り、各自それを見ながら記事を書くことになる。

こうした観察会の意義を一口で言うなら、言い古された表現だが実物との触れ合いということになるか。博物館でももちろん実物資料は扱っており、海岸の打ち上げの紹介もあるのだが、それは多くの資料を一同に集め網羅的に見せると言う利点がある。一方環境から切り離して並べたものである。それを野外での実際の姿につなげる役目をするのが観察会のような野外活動であると思う。従ってそれは展示と対立するものではなく、相補う性質のものなのである。

●日曜日―カエルを調べよう

あまりよい天気予報でなかったので心配していたが夕方には晴れ間ものぞき、予定のカエルの観察会ができることになった。今日の観察会は一般の観察会とは少し異なり、「カエルを調べよう」という市民参加の公開調査の参加者を

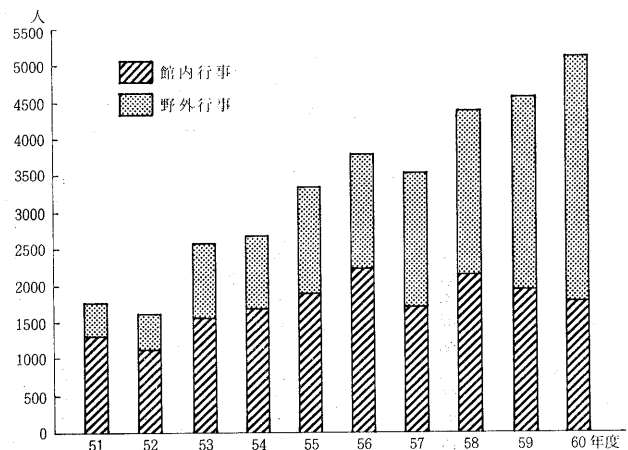
対象とした実地研修の会である。

「カエルを調べよう」は先に触れたタンポポ調べに始まった「みんな調べよう」の今年度の行事で、タンポポからツバメ、セミのぬげから、二回目のタンポポと続けてきた系列の催しである。昭和五十九年度には環境庁の主催した緑の国勢調査の身近な動植物調査に館として参加者を募って団体参加した。それぞれの調査結果は研究報告に掲載したり、報告書を発行して公表し、常設展示にも生かしている。

普通の観察会は参加者がどうしても受け身になってしまいがちだが、公開調査は責任を持って担当地域を調べるので、主体的に学ぶとよい機会になる。いわば入門篇の観察会、やや関心の高まった人の為の公開調査、さらに特定のテーマを追求したい人の参加できるサークル、こうした重層的な活動の構成こそ、博物館活動を活性化する鍵であると思う。

今年度のカエルの調査は平塚・大磯・二宮を対象とし、各自一キロメートル四方程度の調査区を受け持つて、二百メートルおきくらいに設定された調査地点に行つて、どの種類のカエルの声が聞こえるかを調べて記録するというものである。五・六月によく鳴く五種類のカエルを対象としている。今までも夜にカエルの声を聞く観察会は度々実施してきたので、声の聞き分

図一 2 行事の延べ参加者数



「平塚市博物館年報10号」による

けに慣れている人がかなり育ってきているが、今度の調査にあたって三回の野外研修の機会を設け、より正確に分布調査ができるように考えた。

午後四時の定刻、集合場所の駅には二〇人ほどの参加者が集まっていた。目的地でバスを降り、始めの挨拶をする頃には現地に直接来た人も含め、総勢四〇人近くにふくれ上がった。参加者の把握をちゃんとするという趣旨からは集合場所を一つに決めるのが本来のやり方なのだろうが、参加し易さを第一に考えると、

現地合流でもよいですよということになる。地域博物館としては、多少ルーズに見えてもその方がよいのではないかと思っている。

初夏はもともと日が長い季節で、カエルの鳴き出すにはまだだいぶ間がある。神社の境内によつてアリジゴクを見たり、クスノキの葉の匂いをかいたり、いろいろな観察をしながら歩いていく。誰かがマムシだと叫ぶ。急いでいってみると、模様はよく似ているが安全なアオダイショウの子どもであった。手に抱きあげて、みんなに近くから見てもらう。ちよつと触つてごらんというとはじめは尻ごみする人が多いが、一人が思い切つて触ると、我も我もと大騒ぎになる。大人でも生まれて初めて触つたという人も多い。へびくらい偏見を持たれている動物はいないので、これを機会に関心を持つて欲しいと話す。

目的地の水田に着くと、もう一部には水が張つてあり、アマガエルやシュレーゲルアオガエルの声が少し聞こえてくる。ここで夕食にし、食べ終わったら子どもたちを中心に明るいうちにカエル探しをすることにする。

元気な子どもたちは短い時間の中で、実にいろいろな物を見つけてくる。水路に住んでいるカワニナやサワガニ、カエルではアマガエルとツチガエル。ビンに入れてよく見てもらい、カエルの雄雌などの話をする。動植物は持ち帰らない約束なので、観察が終わつた動物は手分けしてもとの環境にもどしてやる。

そうこうする内によく夕焼けも色あせ、夕闇が迫つてきた。水の入つた田圃を中心にアマガエルとシュレーゲルアオガエルの声が一際高くなる。土手に立ち止まつて目をつぶつて耳を澄ますと、カエルの世界に引き込まれていくような不思議な感覚に襲われる。残念ながらツチガエルの声は聞けなかったが、シブイロカヤキリモドキという成虫で冬を越すキリギリスの仲間が翅を擦り合わせて鳴くところをじっくり観察することができた。平塚駅に戻つて解散したのは午後八時半を回つた頃だった。

● 終わりに

学芸員の日常を紹介する形で地域博物館の姿

を描いてきたが、こんな博物館だったらどの町にもあるといいなといった読み方をして下さつた方がいれば望外の幸せである。図書館は自転車を通える距離に分館を配置するといったことが常識的に論じられる時代になってきた。公民館もしかりである。しかし博物館は未だに、市民が日常的に利用する施設というよりは、もつともらしいシンボリックな感覚で計画されることが多い。

しかし手前味噌ついでに言えば、学芸員は日常生活の中で起こる疑問に答えてくれる大変便利な存在なのである。道端の花の名が知りたいたい、この町には何種類の鳥がいるのだろうか、こんな素朴な疑問でも、それに答えることができるのは、地域についてのオリジナルな情報を蓄積している博物館しかない。

博物館があると便利だなあと多々の人に知ってもらいたい、夕食の話題に時々博物館の展示や行事のことが出るようになったらどんなによいだろう。町の学芸員はささやかにこんな夢を描いている。

△平塚市博物館学芸員▽